第９課　試練、患難、リスト

【暗唱聖句】

「そのまことに貴い兄弟たちに協力するものであり、神の僕モーセによって授けられた神の律法に従って歩み、わたしたちの主、主の戒めと法と掟をすべて守り、実行することを誓い、確約するものである」ネヘミヤ10： 30

【日曜日・歴史の神】

「ユダの王ヨヤキムが即位して三年目のことであった。バビロンの王ネブカドネツァルが攻めて来て、エルサレムを包囲した。主は、ユダの王ヨヤキムと、エルサレム神殿の祭具の一部を彼の手中に落とされた。ネブカドネツァルはそれらをシンアルに引いて行き、祭具類は自分の神々の宝物倉に納めた」ダニエル1:1，2

ユダがバビロニア帝国に侵略されたとき、ネブカドネツァル王は神殿の祭具類を自分の神々の宝物倉に納めたとダニエル書に記録されています。実際にどれくらいの量だったのかということがエズラ記1章に書かれてあります。

「その数は次のとおりであった。金の容器三十、銀の容器一千、小刀二十九、金杯三十、二級品の銀杯四百十、その他の祭具一千、以上金銀の祭具の合計五千四百。シェシュバツァルは、捕囚の民がバビロンからエルサレムに上って来たとき、これらの品々をすべて携えて上った。」エズラ記1章9～11節

神様はあいまいな方ではありません。すべてのことが神様の御手、ご計画の中にあり、すべての歴史を神様は支配されています。このような奪い取られた祭具の数や種類まで詳細に記録されているのは、わたしたちも同じように数えられ、覚えられているということを現わしています。

　バビロニア帝国は紀元前539年10月にメド・ペルシャの連合国によって滅ぼされましたが、そのペルシャ帝国の王ベルシャツァルは千人の貴族を招いて大宴会を開き、バビロニア帝国がエルサレムの神殿から奪って来たその金銀の祭具で、王や貴族たちとお酒を飲み、金や銀、青銅、鉄、木や石などで造った神々をほめたたえていると、神の手が現れて、壁にペルシャもバビロンと同じ運命をたどることが示されました。それにも関わらず王は回心することもなく、その晩のうちに命が取られたのでした。このようにすべての歴史は神が動かしていることが示されたのでした。

【月曜日・「自分たちの町に」】

エズラ2章にバビロン補囚から帰還した人たちのリストが書かれてあります。そして、ネヘミヤ7章にも同じリストが繰り返されています。退屈な記録に思えるかもしれませんが、これらの帰還者たちが、エルサレム再建を成し遂げたのです。もちろん、すべては神様がなさったことですが、これらの人々の努力や貢献を神様は忘れてはいません。だから2回も同じリストが繰り返されているのでしょう。

「祭司、レビ人、門衛、詠唱者、民の一部、神殿の使用人、すなわちイスラエル人は皆それぞれ自分たちの町に住んだ」

荒廃したエルサレムの街を立て直し、そこに住むと言う事は本当に驚くべきことでした。周囲の人々からもそれは奇跡だと思われたに違いありません。しかし神様の言葉に従った結果、エルサレムの街は見事に再建したのでした。ここが重要なポイントです。

【火曜日・祭司はどこに】

バビロンからエルサレムに帰還できた事は、驚くべき神様の奇跡でありました。しかし、問題がなかったわけではありません。その1つは、すべての者たちが帰還を望んだわけではなかったことです。その大きな理由は、バビロンに連れてこられた時から既に約150年が経過していました。彼らはバビロンで生まれ育ちました。例えば、日系アメリカ人は自分のことを日本人と言うよりもアメリカ人だと思っている人が少なくありません。生まれ育った場所が自分の故郷だと思うのは自然なことです。だから、エルサレムに帰りたいと思わなかった人々がいても不思議ではありません。また、エルサレムへの帰還は、多くの混乱と危険が伴うことが予想されましたし、バビロン及びペルシャでの生活において、成功を収めている者たちも多くありました。

エズラが、帰還希望者を見渡すと、レビ人が少ないことがわかりました。神殿での奉仕においてレビ人は欠かせません。そのためエズラは約2000家族のレビ人を説得しました。

【水曜日・神の前に身をかかめる】

「あなたの神、主のもとに立ち帰り、わたしが今日命じるとおり、あなたの子らと共に、心を尽くし、魂を尽くして御声に聞き従うならば、 あなたの神、主はあなたの運命を回復し、あなたを憐れみ、あなたの神、主が追い散らされたすべての民の中から再び集めてくださる。 たとえ天の果てに追いやられたとしても、あなたの神、主はあなたを集め、そこから連れ戻される。」

このような預言の言葉を通してエズラとネヘミヤは、出エジプトで神様がなさったように、バビロン捕囚においても、心を尽くし魂を尽くして神のみ声に聴き従うならば神様が補囚から解放してくださるという神様の約束を知っていました。 自分たちの罪もかかわらず神様は哀れみ、導いてくださることもわかっていました。しかし、それは旅の途中で、何の問題もないと言う意味ではありませんでした。

「わたしはアハワ川のほとりで断食を呼びかけ、神の前に身をかがめ、わたしたちのため、幼い子らのため、また持ち物のために旅の無事を祈ることにした。」

エズラは、旅に伴う危険を思い、断食を呼びかけ、神のみ前に身をかがめることをしました。ネヘミヤのように、王様の助けと保護を求めることもできましたが、そうする事を恥ずかしいことと考えました。それよりも神様に祈り神様の力を求めたのでした。

【木曜日・聖なる町で】

「民の長たちはエルサレムに住んでいた。ほかの民はくじを引き、十人のうち一人が聖なる都エルサレムに来て住み、残りの九人が他の町々にとどまるようにした。民は、進んでエルサレムに住むすべての人々を祝福した。

」 ネヘミヤ記11章1、2節

エルサレムの町に住んだのは全員ではありませんでした。民の長と10人の内1人がくじで選ばれて住むことになりました。暮らしやすさから言えば、エルサレムの町の中よりも郊外のほうが良かったのかもしれませんが、選ばれた者たちは犠牲を伴いながらもエルサレムの都を良い場所として発展させていく必要がありました。民たちは、エルサレムに住むことになった人々を祝福したとあります。自分たちの代表としてエルサレムに送り出すという気持ちだったのかもしれません。現代も世界的に大都市伝道の重要性が叫ばれています。神様はエルサレムの住人を選ばれたように、都市に入り献身する人々を選ばれます。